査読論文

行政が主催するスケートボードイベントにおける課題について
― 徳島県内で開催された３つのイベントを事例として ―

太 田　幹 也[1)]，　矢 部　拓 也[2)]

[1)] 徳島大学大学院創成科学研究科　c1022530010@tokushima-u.ac.jp
[2)] 徳島大学大学院社会産業理工学研究部　yabe.takuya@tokushima-u.ac.jp

Issues regarding skateboarding events sponsored by the government
– Examples of three events held in Tokushima Prefecture –

Mikiya Ota [1)], Takuya Yabe [2)]
[1)] Graduate School of Science and Technology, Tokushima University
[2)] Department of Science and Engineering for Society and Industry, Tokushima University

Abstract

Up until now, sports in Japan have been managed mainly by schools and companies, but now sports called lifestyle sports such as surfing and skateboarding are growing at a rapid pace. Skateboarding can be said to have changed its recognition and attention the most before and after the 2020 Tokyo Olympics. Influenced by this, local governments are holding events that incorporate skateboarding to create excitement. Originally, it should not be possible for the government, which is at the opposite end of the spectrum in terms of values, to promote this, so why are these efforts being made? In order to understand what kind of practices are actually being carried out, we will discuss three cases in Tokushima Prefecture that differ in the nature of the management body and the degree of understanding of counterculture that differs from that of major sports. The purpose of this study is to understand the current state of skateboarding events promoted by Japan, and to clarify the problems and challenges of their management methods. As a result of fieldwork, factors such as a mismatch between the old style and the park's new style, controlled management versus counterculture, lack of understanding of street culture, and differences in culture and enjoyment between different events even within the same street culture were revealed. We believe that this is largely influenced by their experience with lifestyle sports such as skateboarding and their understanding of counterculture. With more skateboarding events expected to be held in the future than ever before, the government needs to understand the history of skateboarding and the nature of its physical culture. On the competitors' side, it can be said that the key to success will be to successfully combine public nature and counterculture through mutual compromise, while also taking into account the trend toward a newly formed sport. To this end, it is urgent to create a new management format in which all those involved in the event form their own positions and from a public perspective.

Keywords: lifestyle sports, skateboarding, skate park, counterculture, school sports

１．序　論

これまでの日本のスポーツは学校と企業を中心に運営されてきた。特に若年層の日本におけるスポーツの特殊性として、文部科学省がスポーツを所管している点や、ほとんどが学校教育に属している点があげられる。なかでも運動部活動は、日本特有の文化であり、身体活動だけではなく、努力や忍耐、礼儀など人間形成の有効な手段としても運用されてきた（中澤, 2011）。

しかし、ここ最近、少子化はもちろん勝利至上主義から生じる諸問題から運動部活動への参加率も低下し、現在、地域への移行制度も検討されている（小野・庄司, 2015）。

そんななか、急速なスピードで成長しているのが、学校教育とは親和性の低い「ライフスタイルスポーツ」である。「ライフスタイルスポーツ」は、1960 年代にアメリカで誕生した新たなスポーツの総称で、成果主義的な近代スポーツ文化とは異なる性質を強調し、独自の生き方とアイデンティティ構築のために重い投資をしていることを焦点化する用語（Wheaton, 2019）であり、その特徴として、個人主義、ハイリスク、反競技志向を有することが挙げられる（Rinehart, 2003; Wheaton, 2004）。

東京オリンピック 2020 開催の前後で、認知度、注目度が急激に変化した「ライフスタイルスポーツ」のひとつに、スケートボードが挙げられよう。国際オリンピック委員会（IOC）が、東京オリンピック 2020 に向け、2016 年に追加種目として導入したのは、スケートボード、サーフィン、BMX など近代スポーツとは異なる「ライフスタイルスポーツ」であった。これらは、メディアでも多く取り上げられ、日本でも若者を中心に人々の関心を集めた（市井, 2019）。そして、東京オリンピックでの競技において日本勢のメダルラッシュもさることながら、チャレンジへの称賛や選手同士が称え合うシーンは連日メディアに取り上げられ、国民の注目を集める結果となった。

スケートボードの歴史をみると、1970 年代にアメリカ西海岸から現代アメリカの代表的な若者のスポーツとなり、ストリートカルチャーとして日本に上陸した。それ以来、ファッション性も高く、格好良さや手軽さもあり若者を中心に根強い人気を博している。その一方で、夜間の騒音や器物破損等の迷惑行為が住民との間で問題となり、公共空間から排除されてきた経緯もある両義的な性質を持ったものである（田中, 2002, 2003, 2016）。特に 1990 年代に入ると、「行政の嫌われもの」とまで評され、路上でのスケートボードが少年補導の理由にもなった（塩見, 2023）。

このような両義性をもつスケートボードではあるが、海外では、「逸脱者」としての「不良」の若者を、スケートボードの実践を通じて社会へと包括する場として行政がスケートパークを設置する場合もある。学校に行かない彼らが、スケートボードを通じて人生の意味を見出してゆくことで社会的包摂を目指している（Baker, 1999; Wheaton, 2019)。

しかし、日本では、このような社会的包摂の場というよりは、地方創生的な側面によりスケートパークが公共に受容される傾向にある。最近は、「若者文化の発信によるまちづくり戦略」として、スケートパークを積極的に設置する自治体も少なくない。伊與田・坪井（2005）によれば、スケートパークは、コートのサイズなど決まった規格は無く、フィールドの広さや形状によって設置するセクションの数や配置等、自由なレイアウトが可能であるといった、他のスポーツ施設に無いフレキシビリティを有しており、2017 年の全国のスケートパークに関する調査では公民併せて 100 程度であった施設が、2021 年 6 月の調査では 418 施設を数える。そのうち公共のスケートパークは 243 施設となり、現在も増え続けている。その一方でゴミの放置や夜間の騒音等、一部のマナーの悪い利用者の問題行動が地域住民の理解を得られず、公共のスケートパーク設置を巡り賛否が分かれ、閉鎖に追い込まれるパークもある。

徳島県のスケートボードの公共施設化の事例として、徳島県鳴門市企業局における「BOAT RACE 鳴門」事業におけるスケートパーク設置がある（図 1）。

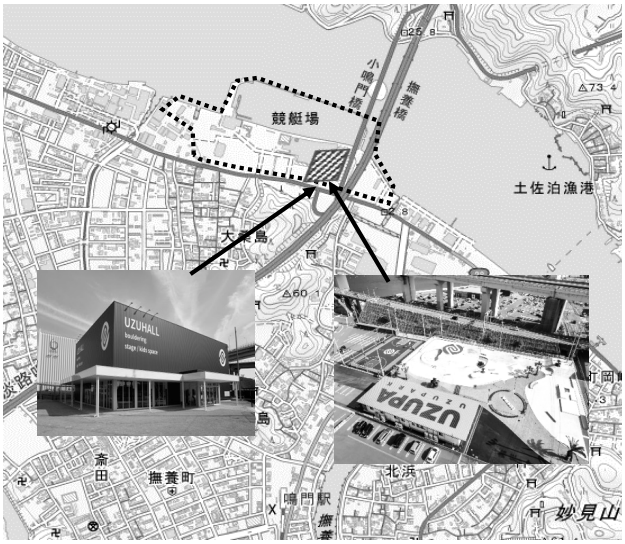

図 1 鳴門市における BOAT RACE 鳴門ｴﾘｱとｽｹｰﾄﾊﾟｰｸの位置

これは、2015 年のボートレース鳴門のメインスタンドの規模縮小に伴う跡地の有効活用として設けたもので、本来的には「公共」とは親和性の低いスケートボードではあるが、若者のスポーツ振興及び交流人口の増加等を目的に、2018 年にその敷地内にスケートパークをメインに、バスケット３×３コート、サイクルステーションの施設を設置し、2019 年には隣接の UZU ホール内にボルダリング設備を設置しアーバンスポーツエリアとして無料開放（一部有料施設有）している。スケートパークである UZU パークに関しては 2024 年 10 月、開設 5 年での利用者数が約 15 万人（ボートレース企画課提供）と人気を博している。利用者が多い背景には、行政が設置し管理運営するスケートパークにも関わらず、既存の行政施設のような管理体制をとらず、「新しい」独自の管理体制を作ったことに一因がある。それは、スケートボード固有の抵抗文化を理解した運営だからこそ「ライフスタイルスポーツ」の特徴でもある楽しさや自由を求める人々に受け入れられ、太田（2020）が明らかにしたように世代を超えた異種混合のネットワークを通じて新たなスケートボード文化のコミュニティを形成する等、「成功」した事例であると位置づけられる。この UZU パークの効果か、東京オリンピックの効果かは不明であるが、近年、徳島県内では既存のイベントに、スケートボードの体験会やデモンストレーションなどを取り入れられる機会が増えた。

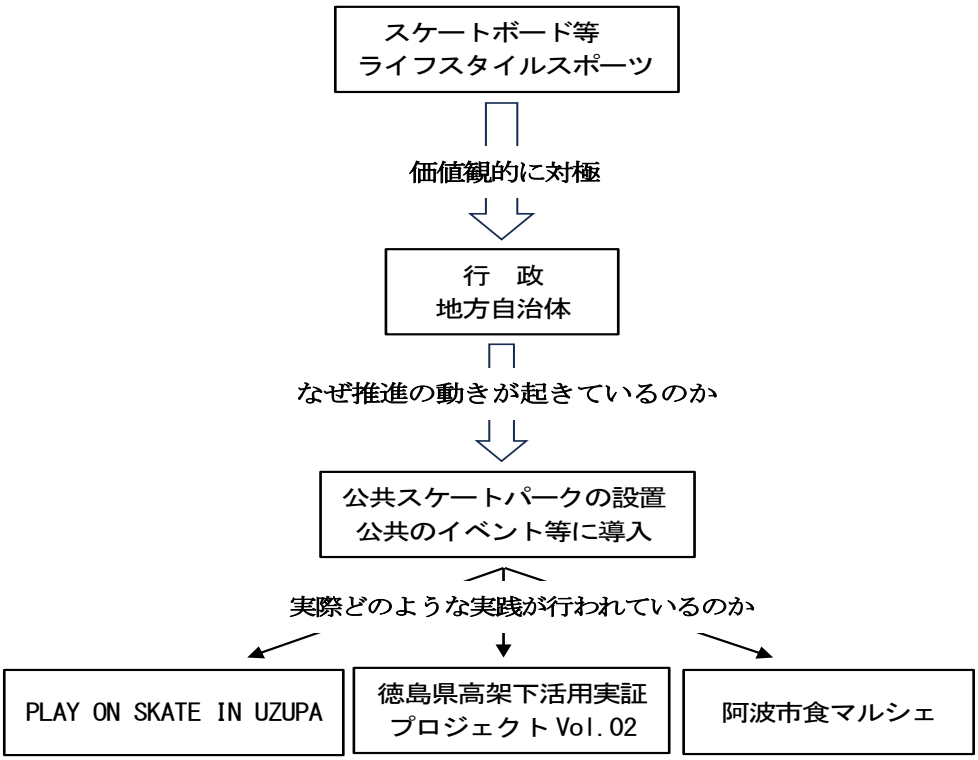

図 2　徳島県内のスケートボードイベントを分析するための研究枠組

本来、学校体育や企業スポーツと親和性が低いスケートボードは、「不良文化」「対抗文化」的要素を持っており、当然、これは正統派、権威の権化である行政の価値観と齟齬をきたし、先に述べたように閉鎖するという問題も起きている。では、行政がスケートパークを推進する際にどのような点に気をつけ、問題が起きた時にはどのように解決すべきであろうか。本稿では、行政が関与して開催された 3 つのイベントを通して、「公共」が推進するスケートボードイベントの現状を把握し、行政が主要スポーツとは異なる対抗文化への理解度といった観点から考察し、運営手法の問題点及び課題を浮き彫りにすることを試みた。

２．調査方法

本研究では、本質的には行政の正統性とは真逆の「不良文化」「対抗文化」を有している「ライフスタイルスポーツ」としてのスケートボードが、どのような過程を経て、若者のための政策として、地方自治体の政策に組み込まれてゆくのかを明らかにするために、スケートボードに関する先行研究に見られる観点を参照し、その意味形成過程を検討するための研究枠組みを図 2 のように設定し、下記の 3 つのイベント実施事例を分析した（表 1）。

これらのイベントに参加し、参与観察及び主催者、運営団体、参加者へのインタビュー調査を実施した。そこで、近年の日本における行政の施策に取り込まれる点に注目し、その関係機関等が開催するイベントの現状を提示し、自らも「ライフスタイルスポーツ」の指導経験を有し、40 年以上実践してきた筆者の目線から分析することで、スケートボードイベントに対応した新しい公共施策の運営方法を考察した。

３．結　果

3-1. PLAY ON SKATE IN UZUPA

3-1-1. イベントの概要

UZU パークにおいてコロナ明けの 2022 年 8 月 27 日、28 日に初心者対象のスケートスクールとプロライダー達によるデモンストレーションが

表 1　今回の研究で分析したイベント実施事例の一覧表

	PLAY ON SKATE IN UZUPA	高架下活用実証プロジェクト Vol.02	阿波市食マルシェ
開催日時	2022 年 8 月 27 日 11:00 ～ 18:00 28 日 11:00 ～ 17:00	2022 年 9 月 10 日 12:00 ～ 18:00	2022 年 10 月 10 日 10:00 ～ 15:00
開催場所	UZU パーク	徳島県城東町（末広、住吉工区）の高架下	市場センターパーク（市庁舎北）
開催内容	初心者対象のスケートスクール、プロスケーターデモンストレーション、キッチンカー、メーカーブース、地元アーティストのライブ	初心者対象のスケートスクール、スケートボードデモンストレーション、高架下マルシェ	特産品、キッチンカー、ステージイベント、 （スケートボード、BMX デモンストレーション）
主催団体	鳴門市企業局 実施には関与せず（名義貸し）	徳島県県土整備部道路整備課	阿波市観光協会
依頼先 実施団体	ムラサキスポーツゆめタウン徳島店	ムラサキスポーツゆめタウン徳島店	地元の BMX、スケートボードの競技経験者
イベント概要	UZU パークでの民間大手のアクションスポーツショップが企画運営したスケートボードイベント	徳島県が高架下利活用の実証実験として採用したスケートボードイベント	阿波市観光協会が地元イベントの一つの企画として採用したスケートボードイベント

メインのイベントが開催された。会場内にはキッチンカーやメーカーブースの出店もあり、大勢の人で賑わっていた。

当初の調査目的は、太田（2021）のインタビュー対象者でパークに頻繁に来ていた若者たちの現在をこの機会に調査することであったが、日曜日のイベント参加者には誰一人知っている顔はなく、唯一の知人は、ムラサキスポーツゆめタウン徳島店のライダーである中学生のみであった。彼の父親に聞いたところ、こういうのには普段来ている中高生は参加しないとのことであった。加えて、主催者である企業局のスタッフの姿もイベント会場にはなかったことが気になった。

本イベントにおける無料のスケートボード教室の参加者の多くは、私の予想に反し、スケボー未経験と思われる親が就学前のこどもを連れての参加が多数みられ、人気を博していた。スクール受講生は、全員ヘルメットやプロテクターを着用しており、これまでのストリートスタイルとは異なった「普通」の親子（写真 1）であり、スクールの様子からは、新たなパークのスケートスタイルを目指すキッズたち（写真 2）であることが伺え、裾野の拡大を感じた。

それに対しデモンストレーションでは、写真 3 のようにストリートスタイルの高難度のトリックを披露しようとするが、スキルの問題なのかノーメイクが続いた。しかし、彼らもイベントを盛り上げようと何回もチャレンジするが、失敗が続き結局メイクには至らず、バツが悪かったのか、せめてものストリート的な演出として不良文化を体現した裸でのパフォーマンスを始めてしまった（写真 4）。焦ってここが公共のスケートパークであることすら忘れ、出演者だけが盛り上がってしまった。

その様子を新たなパークのスタイルを望むキッズたちは、彼らのストリート的なトリックに見入ることはなく、次に始まるスクールの場所に移動しており、ストリート型のデモンストレーションには特に興味がなく受け入れられていないように思えた。

スケートスクールに参加している親はスクールの様子や子どもの写真を撮るのに夢中になっ

写真 1 スクール参加の普通の親子

写真 2 初心者スクールの様子

写真 3 ストリート型のデモンストレーション

写真 4 裸でのパフォーマンス

表 2　スケートボーダーへのインタビュー内

Q	両日ともにイベントに参加しなかった理由は？
A	・このようなイベントは、初心者が多く、パークの暗黙のルールを理解していない人が多い ・自分の描きたいラインをとれない ・衝突等で怪我をさせてしまう心配等もある ・逆にストレスが溜まってしまう
Q	デモンストレーションへの興味はなかったのか？
A	・世界で活躍している選手たちがやるなら興味はあった ・このメンバーはストリートスタイルのトリックが中心だろうしレベル的にも大体予想はついた ・you tube の動画の方がアグレッシブで、何回も再生可能、最新のトリックの研究になる
Q	UZU パークに来ない日はどうしてる？
A	・地元（小松島市）のしおかぜ公園の一部に自作のセクションを設置し、滑っている
Q	今後、UZU パークへの要望はあるか？
A	・将来のオリンピック選手を輩出するという目標があるのなら、海外の大会会場のような上級者向けのセクションを設置してほしい ・パーク内で初心者との滑走区域が明確に分かれて、接触事故等の心配もなく思う存分練習できる

ており、調査のために話を聞くのは、折角の親子のコミュニケーション時間を奪うようで憚られたので、今回のインタビューは断念した。開催日当日、会場に姿を見せなかった企業局のスタッフと太田（2021）のインタビュー対象者に対し、後日、聞き取り調査を実施した。

3-1-2.「主催者」である鳴門市企業局へのインタビュー

イベント主催者である企業局次長へのインタビューによると、今回のイベント開催は、企業局の発案ではなく、イベントの提案、企画運営、進行はすべてムラサキスポーツゆめタウン徳島店が担当した。企業局が主催となっている点については、基本的に UZU パークの占用利用は、企業局の主催事業以外は不可であるが、ムラサキスポーツには、UZU パークに広告掲載をいただいた代わりに会場提供の約束をした経緯があるので、ポスター、パンフレットでは企業局主催としたということであった。

キッチンカー、メーカーブース、ライブ等の段取り等、すべてムラサキスポーツが手配し、今回のイベントに関して企業局は一切、関わっていない。なぜなら、企業局が企画・運営するよりもムラサキスポーツの方が、実際にスケートボードイベントのノウハウがあるし、メーカーとのネットワークもあるので、すべてお任せした。また、今回のイベントは、コロナ禍ですべてのイベントが中止になっているなかで、夏休みのイベントとして良いと思ったので、占用使用を許可した。今後もこのようなイベントを通じて底辺の拡大や若者のスポーツ振興に努めたい、ということであった。

また、２日連続のイベントは初めてと記憶するが、開催後の感想については、両日ともに多数の来場者で、スクール、デモともに好評だったと聞いている、とのことであったが、実際にイベントに参加した私の目からは、前述のように、スクールに参加した新たなパークスタイルを望むキッズ達とストリートスタイルにとことん拘り、デモンストレーションを行った出演者との間にミスマッチが生じていたように思えた。

3-1-3.　当日参加しなかったスケートボーダーへのインタビュー

続いてスケートボーダーへのインタビューは、

太田（2021）においてヒアリングを行った社会人男性 39 歳、高校生 18 歳、16 歳の 3 名に今回も実施した。内容は、表 2 のとおりである。

3-1-4. PLAY ON SKATE IN UZUPA のまとめ

今回のイベントでは、「ストリートカルチャー」とは親和性の低い、新たなパークのニュースタイルを目指す普通の親子と不良文化を体現したストリートスタイルのトリックを披露しようとするデモンストレーターとのスタイルのミスマッチが明確に現れた事例である。さらに、今回のイベントの企画、運営を担当したムラサキスポーツも初心者スクール等の指導で、キッズたちの目指すスケートスタイルは理解していたにも関わらず、彼らが望んでいないストリートカルチャー色の強いデモンストレーションを最後まで変更することもなく実施させたこと、そのプロデュース能力にも問題があったのではないか。

結局、現在の競技スポーツへと変容しつつある新たなパークのスケートボーダーの傾向について、運営を担当したムラサキスポーツのスタッフや今も対抗文化としてのオールドスタイルのスタンスを堅持しているデモンストレーターたちが、理解していなかったことに問題があったと言える。また、UZU パークに頻繁に来ていた若者たちが、UZU パークから排除されたのではなく、ホームパークではあるが決して縄張り的な居場所ではなく、みんなに開かれた公共のパークであるという意味を分かっているからこそ、自分達の意思で別の場所での滑走を選んだということは、すでに彼らも新たなスケートボード文化の要素を持ち合わせていると理解できた。

また、youtube を活用したトリックの習得スタイルや情報発信は、一定の共有ネットワークのなかでの新たなメディア学習体系を構築している。これらの情報発信は、視聴者に多くの選択肢や自由を提供し、若者文化の解体とスケボー文化消費の多様化が進み、ひとりでも楽しむニュータイプのスケートボーダーが増えていると推察出来た。

3-2. 徳島県高架下活用実証プロジェクト Vol.02

3-2-1. イベントの概要

2 つ目のイベントは、県土整備部道路整備課が、徳島市城東町の高架下活用策を検討するための実証実験として開催した事例である。高架下という場所は、スケーターにとって雨や強烈な日差しから守ってくれるほか、車両の音で滑走時の騒音を軽減してくれる聖地ともいえる好都合の滑走場所である。今回は、現在の新しいパーク文化に逆行するかたちのストリート系のスケートイベントを行政がなぜ開催し、どのように運営するのかに注目し、調査対象とした。

開催日当日、高架下に到着後すぐに違和感を覚えたことは、「ライフスタイルスポーツ」と密接な関係にある「音楽」が流れていないことであった。そして、滑走場所が明確に示されており、それ以外はすべて「滑走禁止の張り紙」がしてあった。対抗文化が最も反発するこの「禁止」事項の多さから、行政の主催者の中にスケートボードなどの「ライフスタイルスポーツ」の経験者がいないだろうと予測ができた。

初心者スクールの参加者は、前回同様にスケボー経験が無いと思われる親とキッズ層が中心で、写真 5 のようにスクール受講生には全員、ヘルメットはもちろんプロテクター（膝、肘、手首）の着用を義務付けていた。ここが主催者である行政が一番こだわった危機管理的な部分であろう。さらに、写真 6 の体育の授業のような 2 列縦隊での整列も「ライフスタイルスポーツ」のスタイルにはない主要スポーツのスタイルであった。

参与観察後にイベント主催者、企画運営団体、スケートスクール参加者にインタビュー調査を実施した。

3-2-2. 行政主導の管理運営

このイベントは、前の事例とは異なり、主催者である県職員が取り仕切って進行した。運営側がストリートの文化を理解していないためか、高架下という格好のスケートボードフィールドであるにもかかわらず、そのようなストリートにおけるトリックを試みるシーン（若者にとっての魅力や醍醐味）になると全て制止するという管理型運営がなされていた。本来の目的とは違うアプローチで「危険」との鬩ぎ合いを楽しむのがストリー

写真 5 スクールでの防具装着の様子

写真 6 主要スポーツ型の整列の様子

写真 7 制止され不満げな様子の参加者

トの醍醐味であるが（田中, 2016）、それらは、学校の主要スポーツの経験しかない主催者には、理解に苦しむ行動なのかもしれない（写真 7）。

筆者から、自由に滑走させるのが、本当の高架下実証実験に繋がるのでは、との提言に対してもこのような使い方は絶対に許可できないと拒否されてしまった。さらにスケートボードイベントに欠かせない音楽、せめてデモの時間帯だけでもという提言も近隣に迷惑になるとの理由で最後まで受け入れられず、本来のストリートスポーツイベントの雰囲気ではなく、全く盛り上がらず終了した感じだった。その要因のひとつは、今回の主催者が検討会議で出た意見だからという理由で、過去の経緯やストリート文化（田中, 2016）を理解していないにも関わらず、都市空間でのスケートボードイベントにおいて、Wheaton（2004）が示したストリートスケーターが一番嫌う規制や制約が多い管理型の運営を強要した点が、高架下での開催を期待していた参加者の反感を買ったと考えられる。そういう状況を気にすることなく、とりあえずイベントを開催したという実績を作れば、実証実験として「成功」と判断する行政の姿勢があるようにも感じた。

主催者である徳島県県土整備部道路整備課の担当者へのインタビュー内容は表 3 のとおりである。

3-2-3. 協力団体であるムラサキスポーツの考え

前のイベントと同様に今回のイベントもムラサキスポーツゆめタウン徳島店が協力団体となっていた。そこで、店長にインタビューを行い、協力の意図やイベントに関する感想をうかがった。以下に要点を記す。

今回、2 回連続で行政との連携イベントとなった点については、東京オリンピックの影響が非常に大きく、加えてコロナの影響もあり個人で手軽にできるスケートボードの愛好家が急増し、実際にスケートボードのマーケットも拡大している。また、このように民間では無く行政が主体となってイベントを行うことで、一般の方の安心度が大きく変わると思う。ただ、行政の職員はスケートボードを含め「ライフスタイルスポーツ」の経験者はほとんど居なく、裾野の拡大や普及に向けての意識はまだ希薄と見受けられる。それが証拠に、イベントの PR も積極的に行わず、結果、体験教室参加者のほとんどが当店の HP や SNS を通じての集客となっている。

スクールは小学校低学年や未就学児が中心のようだったが、この状況をどう見ているかの問いには、一番の要因は、オリンピック種目となったことで、親がスポーツとしてスケボーを見るようになったことで、新たなスケーターの文化が生まれつつあるのではないかと期待を寄せていた。マ

表 3 主催者である徳島県県土整備部道路整備課の担当者へのインタビュー内容

Q	音楽や MC 用の音響が無いことについては？
A	近隣には住宅や店舗がたくさんあり、迷惑がかかるから今回は使用禁止とした。
Q	スケートボードに着目、実施した理由は？
A	高架下のにぎわい創出のための実証実験で、何に活用するべきかの検討会を立ち上げて地元の方や高校生にも参加してもらい意見を聞かせていただいた中のひとつに若者層に人気のあるスケートボードが候補に挙がったから。
Q	今回の結果次第でスケートパーク建設の可能性はあるのか？
A	本来、徳島県はこの場所を利用して専用料金をとることを前提としているため、この高架下にスケートパーク等の建設の構想や予定は全くない。
Q	なぜ構想もないのにスケートボードイベントを開催するのか？
A	検討会議で出された以上、実験的に開催する必要があり、今現在、若者に最も人気があるスポーツで賑わいの創出にはピッタリで集客も見込めると判断した。
Q	現在、街中にスケボー禁止の看板が増えている現状や過去の地域住民とのトラブルを引き起こしたように、このイベントが再びストリートへの誘発要因となる懸念はないか？
A	普段この場所は、フェンスで覆われており進入禁止となっているので、そんな心配はしていなかった。１回きりのイベントとは言え、スケートボードに対する勉強不足で、そういう可能性があるのなら安易に導入した主催者として申し訳なく思う。
Q	多くの親子が初心者スクールに参加していることについては？
A	東京オリンピックの種目となったことでスポーツとして認識されるように変化してきている感じはするが、スタッフ一同スケートボードのことは全く分からないので、企画運営は、すべてムラサキスポーツゆめタウン徳島店に一任した。

ーケットにおいてもキッズ用のスケートボードセットを比較的安価な値段で用意している点も増加に繋がっているとのことだった。ただ、イベントのタイムテーブルは承知しているが、防具の装着等で時間を使い過ぎたにも関わらず、学校の授業のように時間が来たらハイ、終わりと言うのでは、参加者に失礼であると立腹だった。

課題については、継続していける環境やシステムを作っていかないと、これまで同様に一時のブームで終わってしまう。学校スポーツに期待できない以上、我々アクションスポーツショップと行政が連携し、普及するシステムを作っていく必要があると語った。我々は物を売ることが本来の仕事だが、ムラサキスポーツの企業理念にアクションスポーツを通じた地域貢献を掲げているので、このようなイベントで声がかかると積極的に協力するようにしている。野球やサッカーなどと違い、ライフスタイルスポーツはやったことがない人にはその魅力がなかなか理解できない部分もあるが、この子どもたちが大人に成った頃には、スケボーが主要スポーツになっているように頑張りたいと熱い思いを語ってくれた。

3-2-4. スケートボードスクール受講生と親の感想

スクール終了後に、受講生 20 名、その親 14 名に対してインタビューを行い、その内容を表 4 にまとめた。

3-2-5. 徳島県高架下活用実証プロジェクトのまとめ

東京オリンピック 2020 のスケートボード競技においては、DJ による音楽演出や「ゴン攻め」[注1)]等のフランクな MC は鮮烈な印象を与え、多くの視聴者にスケートカルチャーが伝わったと好評を博した（水野, 2021）が、今回のイベントにおける行政担当者が、ストリートのスケートボー

ド文化や過去の経緯を全く理解しておらず、企画運営はすべてムラサキスポーツに依頼したと言いながら、行政特有の管理型の運営で主要スポーツのイメージをスケートボードにも当てはめようとしていたという印象であった。

さらに、ライフスタイルスポーツ自体の経験が

表 4　スクール受講生とその親へのインタビュー内容

Q	このイベントを何で知ましたか？
A	・ムラサキスポーツのスクールを受講しているので、ムラスポの HP や SNS で知った ・主催者の告知で知った参加者は一組もなかった
Q	スケートボードを始めたきっかけは？　（スクール受講生 20 名）
A	・兄がやっていたから ・友達が始めてから ・家にスケートボードがあったから
Q	スケートボードを始めたきっかけは？　（受講生の親 14 名）
A	・東京オリンピックで、特に低年齢層の女子の活躍がきっかけとなり、子供（女子）がカッコよかったから ・コロナの影響で運動する機会の減少したから ・スケボーは一人でも手軽に出来るから
Q	スケートパークではなくストリートでのイベント開催に関しては？（受講生の親 14 名）
A	・初心者で、スケートパークに行ってもセクションを滑ることは技術的に無理なので、逆にこんな場所の方が良い気がする。 ・ここは、普段何にも使われていないはずなので、定期的にこのようなイベントに開放してくれたら有難い。
Q	今回が一度きりの開催については、どう感じるか？
A	・スケートパークを造るためだと思って期待していたのに本当に残念だ ・何のための実証実験なのだ、意味が無いのではないか ・鳴門市にはふたつもスケートパークがあるのに徳島市には一つもない ・こんなに愛好家が増えているのだから無いのがおかしい
Q	なぜスケートボードを習わせたいと思ったのか？
A	・子供がやりたいというが親がやったことが無い ・どのように教えたらよいか分からない ・怪我をしない為にもスクールで基本や基礎を学んだ方が良いと感じたから
Q	親から見てスケボーは、スポーツ？それとも遊び？
A	・まだ子供は遊び感覚と思っているだろう ・親からすれば、オリンピック＝スポーツである ・お金を払って遊びを習うことはない
Q	スケボーすることに対するマイナスのイメージについては？
A	・以前は不良がするものだという思いもあった ・オリンピックの後にガラッとイメージが変わった。 ・始めてみて分かったことだが、スケーターは親切に教えてくれる ・見かけよりもはるかに優しい ・特にマイナスイメージは持っていない。
Q	行政に対する要望はあるか？
A	・今はどこででもスケボーをしてよい状況ではないから、このような場所を開放すべきだ ・こんなに愛好家が増えているのだから各市町に体育館があるように徳島市もひとつくらいスケートパークを造るべきだ

全く無く、従来の学校スポーツしか経験していないと推察される行政職員の対抗文化への理解の貧困さが、本来のスケートボードの持つ創造性や自由といった文化的特色を奪い、結果、せっかくのストリートでのイベントを盛り上がらないものにしてしまったと考えられた。

また、今回のイベントにおいて行政が拘ったことの一つが怪我防止であった。そのために防具装着に時間を費やし、本来のスクール時間が減少したことが残念であった。ムラサキスポーツのスタッフもスケボー経験はあるが指導経験は浅いのか、説明や滑走の流し方や進行については、効率を重視する必要があることに加え、今回のように規制や制約が多かったイベントだからこそ、もっと楽しさが伝わるような遊びの要素を取り入れた内容の実施があっても良かったのではないか。さらに、新たなスケボー文化を担う親子での参加者に対してスケートパーク等での滑走時のルールやマナーについての指導があれば良かったのではと感じた。終了後にムラサキスポーツ店長にその旨を伝え、調査を終えた。

3-3. 阿波市食マルシェ

3-3-1. イベントの概要

３つ目のイベントは、県下随一の農業立市である阿波市の特徴を活かし、「食・農」を基本テーマに、キッチンカーや特産品ブースの出店、ステージイベントでのスケートボード・BMX のパフォーマンスなど多彩な内容で初開催される「阿波市食マルシェ」である。スケートパークでもストリートでもないフィールドで、スケートボードだけでなく、同じストリートカルチャーの BMX も登場するということで、周辺部におけるライフスタイルスポーツ導入へのチャレンジの実態を調査すべくイベントに参加した。

主催者である阿波市観光協会事務局に対し、事前にメールと電話でヒアリングを実施し、スケートボードと BMX を取り入れた理由を尋ねると、①会場は平らで広い舗装面がある、②オリンピック競技に取り入れられ注目度が高い、③比較的容易に会場設営が出来る、④若者や子供に人気がある、⑤地元に競技者が居て協力してもらえると言う理由が上がった。これらの理由から、主催者がストリート文化を理解していないスケートボードなどの「ライフスタイルスポーツ」未経験者であることが予想できた。観光協会という半官半民という点から、高架下イベント同様に「ライフスタイルスポーツ」を軽視しているのではとの不安を抱きながら、開始時間の午前 10 時前に会場に到着すると、すでに多くの来場者で賑わっていた。会場のレイアウトは、メインスペースにはキッチンカーや特産品ブースが配置され、ステージも用意されていた。事前のヒアリングでは、会場内にパークを併設し、自由に滑走できると聞いていたが、メインスペースから一本道を隔てたスペースにジャンプランプやカーブ BOX 等が設置された流用パークが用意されていた（写真８）。

写真８ 会場に隣接の流用パークの様子

しかし、イベントのメインの導線ではないため人目に付きにくい場所で、今回もまた、マルシェ自体の魅力を付加するためだけの Tool として利用されたのかと思いフィールドに向かった。そこには、ムラサキスポーツゆめタウン徳島店のライダーや太田（2021）でヒアリングを実施した顔見知りのメンバーが、スケーボードのパフォーマンスに向けウォーミングアップをしていた。出演者の父親に今回のイベント出演の経緯を尋ねると、知り合いからオファーがあり出演することになったという。出演メンバーは、スケートパークの無い地域でデモンストレーションの場を設けてくれることは、スケートボードのカッコよさを直

に見てもらえる機会でもあり、普及に繋がるので頑張る。と気合が入っていた。

隣のスペースに設置された BMX コーナーでは、スクール等で生計を立てている元全豪チャンピオンやその友人たちが体験レッスンを行っており、レンタルバイクも用意されていたので、多くの子どもたちが体験していた。自転車は体験者にも身近な存在であるせいか簡単なトリックは一発メイクするなど親も含め盛り上がりを見せていた（写真 9）。それに対しスケートボードは、レンタルボードの用意も無く、少数のボード持参の子供達が滑りに来たが、積極的に声をかけることもなく、自分たちが楽しむことに夢中で普及活動に至らなかった（写真 10）。それは、BMX 出演者との年齢や経験の差も要因ではあるが、今回のスケートボードの出演者のなかに事業者がいないゆえに BMX に比べると見劣りしてしまった要因でもある。

パフォーマンスは午前と午後の計２回あり、メインステージ前に特設スペースが設置され、30 分の持ち時間で行われた。この地域では物珍しさもあったのか、多くのギャラリーが詰めかけ彼らのパフォーマンスに見入っていた。しかし、私には同じライフスタイルスポーツに位置づいてはいるが、本来、トリック的に異なるスタイルの種目を同時に同じフィールドでパフォーマンスさせるあたり、当初の予想通り、今回の主催者もライフスタイルスポーツの経験に乏しくストリートカルチャーへの理解度は低く、盛り上がりが欠けてしまうのではないかと感じながら、参与観察を続けた。

写真 9 BMX 体験コーナーの様子

写真 10 スケボー体験コーナーの様子

しかし、PLAY ON SKATE IN UZUPA のようにトリックが決まるまでダラダラ行われたり、出演者だけが楽しみ周りの観客は引いて観ているようなパターンには陥っていなかった。他団体の出演もありタイムテーブルが細かに設定されるなか、MC 担当者が BMX 経験者の大人であることもあり、時間内できちんとパフォーマンスが終了するあたり、当り前ではあるがニュースタイルの運営方式に適合的な運営であった。ただ、1 回目のステージは、BMX のフラットランドに適した平面のみでのパフォーマンスであった（写真 11）。東京オリンピック 2020 で観たような派手なスケボートリックではないために、観客も物足りなさを感じ盛り上がりに欠けたまま終了した。

筆者は、過去のライフスタイルスポーツ経験[注2)]から、一般の方には、セクションを利用しての途轍もなく高い・速い・長いなどのパフォーマンスの方がその凄さが伝わることを知っており、BMX パフォーマーと同様に海外経験が豊富なことから、同じストリートカルチャーを有する者同士の仲間意識も感じていたので、2 回目はジャンプランプを利用してのエアートリック（写真 12）などのパフォーマンスに切り替えることをアドバイスし、BMX パフォーマーと話し合いのうえ、筆者が、音楽のチョイスも含めスケートボードの MC を担当、ギャラリーから歓声が上がるほど盛り上がった。

高架下実証実験イベントは、行政独特の管理型の運営の典型であったが、今回のイベントでは、主催団体のスタッフは初開催で余裕が無かったということもあり、出演者に対して細かな制約を課すことも無く、関係者ではない私が急遽プロデュース、MC として介入してもそれを受け入れる

柔軟さがあった。

主催者は必ずしも「ライフスタイルスポーツ」の経験があったわけではないが、その特徴でもある、上下関係を重要視するのではなく、パフォーマンスをより良くするために、年齢も種目も異なる多様なメンバー間で創意工夫する独特の文化に理解を示す主催者であったことが、盛り上がりに繋がった事例であると言えよう。

写真11　1回目のパフォーマンス

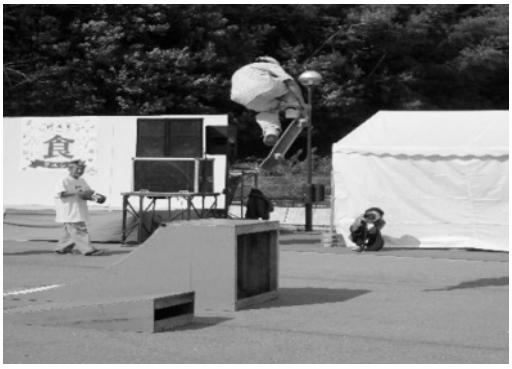

写真12 2回目のパフォーマンス

3-3-2. 阿波市食マルシェイベントのまとめ

市内にスケートパークもなく、そもそもスケートボード文化に希薄な地域性のなかで食のイベントと合わせて実施したことが、珍しさもあり多くの来場者の目に留まり、好評を博したと考えられた。今回のイベント主催者も必ずしもストリート文化を理解しているとは言えず、スケートボードと BMX を取り入れた理由として、会場に平らで広い舗装面があり、若者や子供に人気があるからという短絡的な考えからであった。特に、同じ対抗文化を持つ「ライフスタイルスポーツ」ではあるが、種目によりパフォーマンススタイルが異なることは、ストリートスポーツの経験や精通している者しか分からないことである。BMX とスケートボードを同時にパフォーマンスさせ、演出や MC を BMX 経験者に任せていたために、スケートボードのカッコ良よさや魅力が伝わる演出ではなく、若干の違和感があった。

ただし、高架下実証実験の事例とは異なり、筆者のアドバイスが受け入れられ、各々の魅力が伝わるように自分たちでパフォーマンス内容を変えていくあたり、主催者側に少なくとも、「ライフスタイルスポーツ」には従来の運営手法とは異なる「新しい」手法があることを理解し取り入れていく姿勢が見られたことは評価される。

イベント終了後に主催者にインタビューしたところ、今後も継続してイベントを開催する意向を示しており、趣旨でもあった若者の為のイベント、これを契機とした「ライフスタイルスポーツ」の裾野拡大、阿波市にスケートパーク建設とまではいかないまでも、次回のイベントでは、阿波市在住のパフォーマンス出演者が演技することを期待したいと意欲を見せていた。

4．考　察

4-1. 公共団体が主催するスケートボードイベントの課題

今回の３つのイベント実施事例の比較を通じて、行政がスケートボードイベントを主催する際の成功[注3)]要因を検討するために作成した研究の枠組み図に基づき、調査及び分析の結果、明らかになったことを含め、下記のとおり考察一覧表（表 5）を作成した。

今回の調査からイベント担当者の「ライフスタイルスポーツ」の経験の差、その文化への共感度の差が、イベントの成否において重要なポイントであると考えられた。さらに言えば、調査対象地の徳島県における現状のスケートボードイベントへの参加者の大半が、以前の不良文化でもあるストリートでのオールドスタイルではなく、スケートパークにおいてキッズ層を中心に生まれつつある新たなスケートボード文化、いわゆるニュースタイルであることを理解したうえで、どこま

で歩み寄れるかが成功へキーポイントになる。

高架下実証実験の県庁職員が主催した事例にみられるように、「ライススタイルスポーツ」特にスケートボードの経験が乏しい担当者のもとでは「ストリートカルチャー」や「カウンターカルチャー」への理解度が低く、主要スポーツと同じ感覚でイベントを運営したことが盛り上がりに欠けていた。そこで見られる既存のスポーツの元になる「指導者―選手」といった縦の関係は、行政が管理する施設や施策では当然、指導者の位置を行政が占め、上からの管理体制になりがちである。それに対し、「ライフスタイルスポーツ」は、勝利よりも仲間たちで「自由に」「オリジナリティ」を追求するプレイスタイルが、年齢や性別に関係なく楽しみを共有することで、愛好家の横の関係性が短時間でも構築される文化である（太

表 5　今回の調査からえられた研究枠組みからの考察の一覧表

	PLAY ON SKATE IN UZUPA	高架下活用実証プロジェクト Vol.02	阿波市食マルシェ
主催団体	鳴門市企業局 実施には関与せず（名義貸し）	徳島県県土整備部道路整備課	阿波市観光協会
開催場所	UZU パーク 公共のスケートパーク	徳島県城東町（末広、住吉工区）の高架下	市場センターパーク（市庁舎北）
目的（趣旨）	民間大手のアクションスケートショップが企画運営するスケートボードの普及イベント	徳島県城東町の高架下の活用策を検討するための実証実験にスケートボードを採用	農業立市の特徴を活かした食・農がテーマのイベントの若者集客の目玉にスケートボードを採用
開催内容	スケートスクール、デモンストレーション、キッチンカー等	スケートボードイベント、高架下マルシェ	特産品ブース、キッチンカー、ステージイベント
依頼先 実施団体	ムラサキスポーツゆめタウン徳島店	ムラサキスポーツゆめタウン徳島店	地元の BMX、スケートボードの競技経験者
主な参加者	初心者のキッズとその親 デモンストレーター	初心者のキッズとその親 デモンストレーター	デモンストレーター
主催者	初心者教室の親子のニーズを理解していない進行、運営	ストリートカルチャーへの理解の無さ及び管理型運営への強要	ストリートカルチャーへの理解は希薄だが細かな規制等は無し
スクール参加者	望んでいる新たなパークのスタイルに対応出来ていない不満	怪我防止対策が多く滑走（ﾚｯｽﾝ）時間の短さへの不満	
デモンストレーター	需要の無いストリートカルチャー色の強いデモを最後まで慣行	規制や禁止事項が多く行政特有の管理型の運営への反発	意見を取り入れる柔軟性、メンバー間の創意工夫を生み出す
イベント運営の問題点	オールドスタイルとパークのニュースタイルとのミスマッチ	管理型運営 VS 対抗文化、ストリート文化への理解度の欠落	同じストリート文化でも種目間の文化・楽しみ方の相違
筆者の所見	・キッチンカー等の出店もあり多数の人で賑わっていた ・スクールは普通の親子が多く底辺の拡大が感じられた ・ストリート色の強いデモが参加者に受け入れられていなかった	・スケーターの熱心な指導が参加者から高評価を得ていた ・主催者（自治体）の PR 不足のせいか高架下マルシェも人気無し ・音楽、滑走場所等、禁止事項が多く盛り上がりに欠けていた	・物産展や他のステージイベントも好評を博していた ・主催者側に参加者からの提案を受け入れる寛容さがあった ・平面でのスケボーパフォーマンスは派手さに欠けていた
総合考察	ストリートカルチャーの典型でもあるスケートボードの歴史や身体文化の性質を理解したうえで、カウンターカルチャーと公共性をうまく結びつけることが成功要因に繋がる。		

田, 2021)。最後の阿波市での事例のように、その場で内容を変更したパフォーマンスを「普通」に行う柔軟性や創造性により、イベントは盛り上がって終わることができたことは事実である。

このように公共施策としてのスケートボードイベント等を円滑に行うには、これまでの学校体育や企業スポーツのような上下関係や管理、支配被支配ではなく、カウンターカルチャー特有の「オリジナリティ」や「創造性」を重視した多様なメンバー間の自由で緩やかな繋がりから産み出される相互の連帯や共通意識がイベント等の盛り上がりに繋がるひとつの要因であると考察する。

4-2. 今後の公共施策におけるライフスタイルスポーツ運営のポイント

東京オリンピック 2020 を境に、スケートボードが世間一般でも認知されたと言える。追加種目としての採用から大会開催までの過程の検討で、IOC の国際競技連盟（以下 IF という。）どうしの摩擦（IOC は、スケートボーダーがいない IF が選ばれた場合の問題点をよく理解しており、そのプロセスにかなりの時間と資源を投入した。）が起きていたが、結果的にはテレビ

中継にフィットした競技であることが明確になり、予想以上の成果となった（水野, 2022）ことで、公共のスケートパークも増え、一人でも手軽に楽しめるスケートボードの愛好家が急増している。

一方、カッコよさやファッション性から幅広い年代に人気のサーフィン競技においてもスケートボード同様に、「波乗り Japan」の活躍に注目が集まった。そんななか疑問を投げかけたのが台風をめぐり日程を前倒ししたことである。サーファーなら台風後に波のコンディションが上向くことは一般的な知識であるにも関わらず、台風の怖さよりも波の大きさを優先し、強風のせいで海面がグチャグチャの状態で実施された。水野 (2022) は、ここでもサーフィンをしない組織の方たちが試合を進める空間は居心地が悪かったと舞台裏を明かした。

このように「ライフスタイルスポーツ」の文化は、これまでの学校や企業で実践されてきたスポーツ文化とは異なるものであり、その種目の実践者でないと理解しがたい部分が多い文化でもあり、経験値に大きく左右される点が上げられる。にも関わらずオリンピックでさえ、上記のような状況で運営されているという現実が実際に存在する。それは、本事例分析からも分かるように、ニーズを考慮せずに民間に任せると PLAY ON SKATE IN UZUPA のようなミスマッチがおこる。一方で管理型を強要すると高架下活用実証プロジェクトのような魅力のないものになる。何が正解であるのかが事前に分からない状況においては、現場を踏まえたうえでの試行錯誤を行い、それを成り立たせるメンバーの協同性ができてくると、最初は盛り上がりに欠けたように見えていても、阿波市食マルシェのように最後は一体感が生まれ、満足度の高いものになると期待できる。

東京オリンピック以降、メディアへの　スケートボードの商業化は、各地にスケートパークが増設され、都市デザインとして設計されることで、公園や専門施設として押し込まれ、専門化や競技化が進んでいることから考察すると、従来の若者に限定されたカウンターカルチャー的な境界線が曖昧になり、多様なスケボー文化の消費者が生まれてきていると捉えられる。

今後、これまで以上に多くのスケートボードイベント開催が予想されるなか、行政側はスケートボードの歴史や身体文化の性質を理解すること、競技者側は、新たに形成されつつある専門化及び競技化への流れも考慮しつつ、お互いの歩み寄りにより公共性（パブリックな視点）とカウンターカルチャーの特性をうまく融合させるような新しい運営形態の構築が喫緊の課題といえる。

注 1）スケートボードの専門用語で、手すりや階段などの難所をがんがん攻めることを意味しており、狙い通りの場所にぴったりはまることを「ビッタビタ」と表現する。

注 2）　約 25 年前に当時勤務していた施設にスケートパークを導入し、自らもインラインスケートの指導者として子供たちをサポートしていくな

かで、国内に留まらず海外の大会にも積極的に参戦し、BMX やスケートボードとともに大会を盛り上げた経験を有する。

注 3） 今回のイベントにおける「成功」とは、イベントに携わるスタッフ全員が、目指す目的や趣旨に対して、各々の立場を理解し、試行錯誤の結果、イベントが盛りあがることと定義づける。

【引用文献】

Baker, R. (1999). Children of the Street: A Reinterpretation based on Evidence from Durban, South Afrika.Centre for Developing Areas Research, Department of Geography,Royal Holloway University of London.

Borden, I (2008)斎藤雅子・中川美穂・矢部恒彦監訳、「スケートボーディング、空間、都市 : 身体と建築」新曜社

市井吉興（2019）「思想のフロンティア『アーバンスポーツ』と 2020 年東京オリンピック：国際オリンピック委員会が期待する『スポーツの都市化』とは何か？」『唯物論研究会』28 (1), pp.96-109

伊與田啓介・坪井善道（2005）スケートパークの立地及び地域施設としての特性に関する調査・分析、研究報告集Ⅱ、建築計画・都市計画・建築経済・建築歴史・意匠、75, pp.297-300 日本建築学会

水野利英莉（2022）東京 2020 における新競技がもたらしたもの『現代スポーツ評論』46, pp51-66, 創文企画

中澤篤史（2011）「学校運動部活動の動向・課題・展望 : スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて」『一橋大学スポーツ研究』30, pp.31-32

小野雄大・庄司一子（2015）「部活動における先輩後輩関係の研究：構造.実態に着目して」『教育心理学研究』63 (4),pp.438-452

太田幹也（2020）都市公園行政におけるスケートボード専用のパークマネジメント : 鳴門市の地域開放施設「UZU パーク」を事例として、徳島大学地域科学研究 10, pp.25-37

太田幹也（2021）都市公園行政における公設スケートパークのマネジメントが生み出すスケートボード文化の再生産について : 鳴門市の地域開放施設「UZU パーク」を事例として、徳島大学大学院修士論文

Reinchart,R.E.and Sydnor, S. (2003) To the Extreme: alternative sports,inside and out.State University of New York Press: NY.

塩見俊一（2023）日本におけるスケートボードの揺籃期について『現代スポーツ評論』49, pp.63-75, 創文企画

田中研之輔（2002）都市文化の身体文化―スケートボーダーの生活誌から『現代スポーツ評論』7, 創文企画, pp.158-169

田中研之輔（2003）都市空間と若者の「族」文化スケートボーダーの日常的実践から 日本スポーツ社会学会編 スポーツ社会学的研究 11, pp.46-61

田中研之輔（2016）都市下位文化集団の相互行為に関する社会学的研究 : スケートボーダーの都市エスノグラフィー、一橋大学大学院博士論文

Wheaton, B. (2004) Understanding Lifestyle Sports: consumption,identity,and difference. Routledge: NY.

Wheaton, B.(2019) 市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳、「サーフィン・スケートボード・パルクール : ライフスタイルスポーツの文化と政治」ナカニシヤ出版

2024 年 3 月 22 日受付
2024 年 5 月 19 日改訂
2024 年 5 月 20 日受理